



問文

庫

271



庫  
14



新曲赫映姬

道遙作

文庫14  
D 271



新音楽論

序

本篇は予が所謂新樂劇の第二の圖案なり。用意の『浦島』と同じからざるは、主として題材の然らしめし所なれど、また多少『新樂劇論』以外に出で、試摸し、以て其の不備を補はんと欲せしにも原けり。されば、彼れにては舞踊を本位と立てたるに、此れにては謠唱大分を占め、彼れは俗曲を髓腦となしたるに、此れは寧ろ能樂を根幹と做せり。但し構想、措辭、旋律、樂器等、一切舊格に泥むことなし。

卅八年十月中旬

著者

人物

男性

竹取の翁

竹取の僮

阿倍の御主人

車持の皇子

工の司漢部内麿

帝

六衛の司

女性

竹取の姫

内侍中臣の房子

赫映姫

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

同小童

大臣 官人 小童 雜人 等大勢

武夫 大勢

同工人 甲 乙 丙

女官 六人

同侍女 甲 乙

處

前後とも竹取が家

畿内

時

前は彌生後は仲秋

奈良朝時代

おもしろや

前之幕

第一段

二人  
千引石根は移すとも。千引石根は移すとも。  
心根をいかで移さむ。

竹取の翁と姫と母に上る

なうく わが夫に申し候ふ。凡人には似  
たまはぬ姫なり翁の石させたまふをも長し  
とは思はずとこそ言給へ。誰らに責めたま

おもしろや  
前之幕  
第一段  
二人  
千引石根は移すとも。千引石根は移すとも。  
心根をいかで移さむ。  
なうく わが夫に申し候ふ。凡人には似  
たまはぬ姫なり翁の石させたまふをも長し  
とは思はずとこそ言給へ。誰らに責めたま

新編かぐや姫

前之幕

第一段

二人

千引石根は移すとも、千引石根は移すとも。  
心根をいかで移さむ。

竹取の翁と姫と場の上る。

なうく。わが夫に申し候ふ。凡人には似  
たまはぬ姫なり帝の召させたまふをも畏し  
とは思はずとこそ宣給へ。強ちに責めたま



はば實にやがて消失せたまひなむす。この  
上は如何に勧めたまふとも、其の效あるまじ  
う候ふ。

翁

あはれ。それこそは、多くの貴人を悶えさせ  
て、身をも誤らせつる心ばせの言はするなれ。  
有繫に帝の勅とあらば、懐かしき御答もする  
やと頼みつるに

翁

心あても虚ろとなりぬ。吳竹の、節筒に生り  
し君なれば

姫

たゞ一筋に眞直にて、剛くもありけり節ある  
性の

二人

こちなくぞあるや此の君。

姫

もはや二度の御使の御入あらうする刻限に  
て候ふ。

翁

今更に是非もなし。よし御答を下されむと  
も、只ありのまゝに申さむところ思へ。いで  
く、これにて迎へまゐらせうす。

翁と姫と徐ろに好きとこゝろに坐ふ。

第二段

勅使、内侍、中臣の房子女官六人をあて場に上る。

内侍

思ひの狭霧立つときは、天つ日だにも翳るなり。誰れかは闇に迷はぬ。

誰れか言つし、人生れて婦人の身となる勿れと。あはれ。百年の苦樂おのれが力に由るといふこと。天下幾人の身の上ぞ。

一同

容顔瓊の如くにして、人を移すの粧ひあれば、律が宿に生ひぬるも、即て雲井の御詠め。

内侍

星の光りも氣劣りて

一同

み園生に匂ふ八千草の花にも更に色ぞなき。あら。目覺しの榮えやな。

と竹取が家の門に立停りて、内侍は女官の一人に向ひて

内

かけまくも畏き君の再の御使として、内侍中臣の房子が、まうできぬる由を申したまへ。

女官

心得申して候ふ。

と門内に向ひて

女官

いかに。讃岐の造磨はあるか。かけまくも畏き君の再の御使として、内侍の君の御入に  
てあるぞ。とうく迎へまつり候へ。

これを聞きて翁と姫とは周章つる體あり。

姫

み聲を聞けば今更に

翁

こゝろ怕れて日に向ふ

姫

むぐらならなくに身ぞ顛ふ。

二人

なぞもかく心怕るゝ。

此の間に勅使一同は徐ろに進み入りて上座に坐ひ、翁と姫とは入りかはりて下座に坐ひて會釋す。

内

いかに。造鷹、いぬる日立歸り、御返りごとを奏し奉りつれば、帝以ての外のみけしきにて、此の國に住まむもの、我が命令に背く、奇怪なり。よし、姫は何といふとも、翁の手に養

二人

いともく畏しとも畏しや。

翁

いかで勅りを等閑には承り候ふべき。きのふもけふも、夫婦共に舌を爛かいて、彼の女童を説諭いて候へども、諾とも申さばこそ。強ひて宮仕へに出したて候ひなば、消失せなむと申す。

翁

この翁が手にて生せたるにても候はず。むか

し山にて見つけたんなれば。心ばせも人には  
似ず候ふ。

翁

この上は是非もなし。老いたる奴をば罪な  
はせたまひて、彼の女童をば赦させられ候へ  
かし。

翁も、姫も、悄然として思入りたる體  
なり。

内

あはれ。是非もなき御答ざふらふよ。かぐ  
や姫とやらむは、實にも凡人にては在さ  
り。さらぬだに情けの道は威ひをもて強  
ひたまふべきにあらざるをや。

内

東風暖を生じて、草木自から光りを浮ぶ。

一同

呵嘘して花を促さば、瓶裡の牡丹發くとも。  
可憐ら傷まむ花の色。

内

いろ絲卷を繰返し

一同

たゞ小手卷の穩かに、とき諭したまへや。

と宜しく翁姫を諭す科介あり。

翁

あら。有難き御情け。さはさりながら世に越  
えて

題

こはくもありける下心の

翁姫

もし靡かずば如何にせむ。

内

げに珊瑚は碎くべうして、其の色を奪ふべからず。

翁

伽羅は燐くべしと雖も

三人

のこる香りを如何にせむ。

と三人思ひ悩む思入あり。やゝありて

内

思ひいでたり。此の家の、山本近なるぞ幸ひなる。

内

み狩の行幸したまはむやうにて偶と帝の立寄らせたまはむはいかに。

内

愛憎大かたは眼に在り。見みゆる即て言ひ知らず

延

くしき思ひの通ふてふ。

三人

ふしぎの験し無からめや。

翁

なにごゝろもなく候はむに偶と行幸して御覽せられ候へとよ。

内

うれしやな。かくとだに

一同

なのりて歸る一つらは、霞む雲井の春の音づれ。如何ばかり。叡慮慰みたまふらむ。立歸り。いざや百敷に、聞え上げてむ。

翁 姫

と一同下手へ向ふ。翁と姫とは入りかはりて上手へ廻る。

奴等は、行幸を待たむ。心して、君が行幸を待ちてむ。

と勅使を送り出づ。勅使場を退く。

### 第三段

翁と姫とは元の座に坐ひて奥に向ひ赫映姫を呼出す。

翁

なうく。あが姫やおはする。語らひ申すべき事のあり。とう此のところへ御渡り候へ。

奥にて

姫

なにごとにて候ふやらむ。やがて御前に参るべう候ふ。

と依然奥にて

姫

など狂ふ。地なる影に世人皆。光りは空にありし世の。其の來し方ぞ戀しき。われ勝妙の資を享けて、嘗て青瑠璃の殿に在り。頭に七寶の瓔珞あつて、胸に纖塵の樂欲無う。行住一へに任す興の來去に。只折々の奉仕とて、月の桂の花咲けば、黒衣白衣の天少女。玉を砂の庭も狭に。翻すや舞の袖袂。其の羽衣を着るからに。無量光明具足して。

飛行も自在なりけるが、不思議に得つる懈慢の咎め是非なくも、暫く下土に謫へて、現身となれるうたてさよ。現身の今ぞうたてき。

姫

なうく。翁の待ちわびたまひて候ふ。

姫

何事にて候ふぞ。

と姫よきところに坐ふ。

翁

「またも帝の御使の参らせられ候うて、勅命に背かば罪なはせられむとあるぞ。尙ほやは仕うまつりたまはぬ。」

「なに。帝の勅命に背かば罪なはせられむす」とや。それを怖ろしともおもほえず候ふも

のを。

姫

「いや。若し宮仕つかうまつりたまは、翁には冠りをも賜はらむとなり。」

姫

「もはらさやうの宮仕はつかうまつらじと思ふを、強ひて仕うまつらせたまは、其の冠りつかうまつりて死ぬばかりぞ。只まかせよとだに宣給はせ候へ。やがても消失せなむす。」

翁

「なな爲たまひそよ。官さ冠りも我が子を見奉らでは何かせむ。さりながら、などて宮仕を厭ひたまふぞ。死たまふやうやはあるべき。」

姫

さては尙ほ我が言を

姫

そゞろことゝや聴きたまふ。三人の人に契り  
つる。其の約束もあるものを。帝の勅なれば  
とて。豈空にせむ。高貴なるに。心移すと浮  
世人の。思はむことの便なさよ。

姫

げに道理と覚え候ふ。さりながら、大宮仕を  
も厭ひたまふを、若し彼の三人の人のうちに  
て、阿女が望みたまへる品を眞に取得て來ま  
さばいかに。

姫

誓詞は破るべうもあらず。切なる心の證し  
見する品を實に持來む人のあらば従はむも

姫

世をいつはりの石作り

姫

天竺に二つなき。御佛の鉢といふは

翁

とほ山寺の賓頭廬が。前に年經し煤け鉢。

姫

露の光りも宿さぬを。それぞとは淺き下だく  
み。

三人

われ淺ければ世人皆。淺しとや思ふるれもの  
の。あはれ。世に許多ありけり。あさましや。

翁

かの大伴の大納言は。有繋に詐る心は無し。



姫 蚊の願ねがひに在ありといふ。珠たまをば賜たまへといひけれ  
ば

姫 げに武夫ぶのうの早はやりに

三人 あさましや。咎とがなき妻ひとをも去さりたまひて

さながらの手負猪ておひじの、たゞ勇いさみあらば足たらむ  
とや、無二無三むにむさんに遠近とちんの、山邊やまべを獵あさり、谷たにに  
降りて

姫 蚊には逢あはず

翁 蝮はみに噛かまれ

姫

たまをば取とらず

姫

蜂はちに螫さされて

翁

手を空そなしうして歸かへられけるが

姫

やまうどのやうになつて

三人

やまうどのやうになつて。蝮はみに噛かまれてだに  
斯かうぞかし。蚊あちに逢あは、命いのちあらじを。怖おそろし  
の姫ひめのやつが、人ひとを殺ころさむとするぞとよ。と  
宣のたま給たまひけるこそをかしけれ。

と誰たれひなさむる途端とたんに

第四段

此の家の僮高らかに笑ひつゝ駈け  
来る。

僮

ハ、ハ、ハ、ハ、吉祥。きつしよ。きつしよ。  
祝はしめ。喜ばしめ。天が下の吉祥。

僮

あめが下のきつしよ。天が下のきつしよ。石  
の上の鷹が、燕らめの巢から、てんころりと  
落ちた。子安貝が無うての、心安うおじやる  
の。おぞの鷹よ。あはれ。燕らめの巢から、  
てんころりと落ちた。天が下のきつしよ。

と拍子にかゝつて自ら謡ひつゝ、果  
しなく舞ひ踊る。

翁

やよ。何と申すぞ。石上の中納言のぬしが、  
あやまちしたまひつとは實か。

僮

なかく。

姫

さては燕らめの子安貝は得求めたまはざり  
けるよなう。

僮

さん候ふ。いでや燕らめのつまんびらかに、  
始終を語り申さう。

と悪見得をして座を構ふことあ  
り。さて左の俗曲につれて振事に  
なる。(曲は陰にて唱ふ)。

僮

さても其の後氣は逆上り。心はいとゞいその

上。ふるき軒端に燕らめの。すはこそ子を産むござめれと。子安貝をぞ覘はれける。折から一疋親つばめ。尻尾をおつたて。おつたて尻尾を。すん巢のまはりをひんらひら。ひんらひらく。ひんらひら。時分は宵の間。そりや引いた。ふこの綱引きや。綱引きや畜の。中の大臣が巢を探す。占めたり。何やら。へらつく。ひらつく。物こそ握つた。早おろせ。といふ間にぼつつり頭顛倒。脊骨を打つやら腰の骨。あいた。あいた。あいた。誰れに逢ひた。姫ぎに逢ひた。さて何を握つた。燕らの糞を握つた。

もの笑ひとぞなりにける。

と踊りをさむる少し前かたより彼方にて陽氣なる器樂の聞ゆることあり。廻耳をたつる思入ありて

姫

あれく。何人かまうで來と見えて候ふ。やよや外にいで、見て參り候へ。

僮

かしこまつて候ふ。

と門外に出で向うを眺むることありて

僮

は、あ。あれこそは、火鼠の裘とやらん、火にくべても焚けぬものを持來うと受けあうた有福の愚人ぢや。ちやくと此のよしを申さう。

と門内へ戻り

僮

なうく。やんがて参りまするは、火鼠の裘とやらん、火にくべても焚けぬものを持来うと受けあうた有福の愚人でおりにやる。

翁

さては阿倍の御主人のぬしか。

僮

みうしとやら、あめうしとやら、何れ鈍くさいをのこでおりにやる。

翁

ともかくも爰にゐて、彼の人を迎へ申さう。

と一同居すまひを改むること。

第五段

此のうち下の浮きたる俗曲につれて、右大臣阿倍の御主人、小童一人をゐて、之れに火鼠の裘を入れたる箱をもたせ、かぎりなき思ひに焼けぬ裘、たとと乾きてけふこそは着めといふ歌を麗しき短冊に書いたるを花の枝に着け、自ら肩にし、酔ひ浮かれたる體にて踊りつゝ、場に登る。小童は始終かせになる。(曲は陰にて唱ふ。)

御

かぎりなき。思ひに焼けぬ皮ごろも。袂乾きてけふこそは。君に逢ふとて身は爰許に。魂はふはく、蛻の唐の船が媒つ。のふ。妹脊中。何の五十兩。とち萬兩も。君の爲なら。

何をしどりの。番ひ離れぬ。のほんほん。  
ほんのほん。中ちやえ。

と踊りながら竹取の家の門に着き、  
俄に眞面目になり容體を作ること  
ありて

御

これは右大臣阿倍の御主人が王卿といふ唐  
土人して天竺より世にも稀なる火鼠の裘を、  
買取りて持参りて候ふ。はやく受取らせ  
られ候へ。

物體ぶりて言ふ。

翁

まづ御通り候へ。

このうち御主人は通りながら小童  
に指圖して裘の箱を翁の前へ直さ  
す。

御

いや。先づ其の箱を御覽候へ。くさくさの  
麗しき瑠璃をいろくりに彩りて、珍かに作り  
てあり。又取出いて裘をも御覽候へ。金青  
の色して、毛の末には黄金の光り

御

かゞやきたり。あな。畏こ。五十兩といふ。  
錢にも代へし寶ぞや。

と得意の體なり。此の間翁打寄  
りて裘を取出し、さまざまに見るこ  
とあり。

翁

げにく寶と見えて候ふ。

廻

あな。めでたし。火に焼けぬことよりも、清  
麗なること比ひなし。

と翁装を捧げ持ちて起上り

二人

あな。かしこ。あな。かしこ。げにくく姫の。  
好もしがりたまふにこそありけれ。

と恭しく姫の前に直す。姫は只一目見ても

姫

げに麗しき皮にこそ侍れ。わきて實の皮ならむとも知らず。火に焼かむに焼けずばこそ

姫

人の言にも従はめ。なほ焼きて。試さむ。

翁

それよ。さも言はれたりや。

かばを捧げ持ちて元の座に戻り御主人に向ひ

翁

いかに。申し候ふ。焼きて見むことはさふらふ。

御

この皮は唐土にもなかりけるを辛うじて求め得たるなり。

御

なに疑ひのあらなくに。いざ。火に懸けて。見たまへ。

と此のうち翁は僮をさしまれき装を渡すことあり。僮は受取りて好きところに出で

僮

さらばそれがしが火に懸けて見う。燃えぬとは稀有なものぢや。どれ先づかざいて見う。

位

と火にかざす介。忽ちめらくと  
燃ゆる體。皆々驚く。

やゝゝ。これはどうぢや。

御主人は色を失ひ頭をかへ俯き  
てゐる。

姫

「さればこそ異物の

翁

かはにてやありし。

廻

「のこりなく

御

「もゆと知りせば皮ごろも……

姫

「火にやは堪へむ微風にも。堪へじとぞ見ゆる

人心の。うたてやな。志かすがに。戀には神  
に似るなるを……

御

「人にも似ぬか。我れはもや。錢を頼みて。此  
の日ごろ用はねば。あはれ。理智鈍り。騙ら  
れけるか。おぞの我れ。

姫

「われ得がたきを求めしに。あるひは詐り

翁

「あるひは又。直力に得むと急り

姫

「あるひは他し力草を。只頼むこそ果無けれ。

御

「げに錢をのみ頼みける。報いに理智の金錆び

て。騙られけるか。悲しやな。錢積めば理智も錆ぶるよの。金滓に魂も腐蝕るよやの。

と妻れかへりて竊々と場を退く  
小童も從いて入る。  
翁と姫とは呆れたる思入にて見送る。

### 第六段

舍

いかに。申し候ふ。やがて此のところへ車持の皇子の君の御渡りに候ふ程に豫め其のよしを傳へ申せよとの御事にて候ふ。

こゝへ御主人と入りちがへて車持の皇子に使ふる舍人旅装のまゝにて急ぎ足に出來り門邊に停りて

翁

なに。車持の皇子の君が長き御旅路より立歸らせたまひぬとや。

舍

なかく。蓬萊山といふところにて奇なる玉の枝を得て千餘日を経て歸りたまひつ。御家へも寄りたまはずして、此方へ真直におはしまし候ふ。あれく。もはや渡らせられて候ふ。

と此のうち車持の皇子旅装のまゝ先に立ち玉の枝を入れたる長櫃を從者二人に荷はせ小童に古びたる笠一つ持たせ疲れたる體にて場に登り門へ近くなりて

皇

いたづらに。身はなしつとも玉の枝を。手折



らで更に歸らじ。

皇

と諺ひく竹取が家に進み入りて  
かみくら  
上座にすまひて

いかに。翁命を捨て、玉の枝をはるばると持來たりてあるぞ。とう赫映姫に見せ奉り候へ。

とすべて大へいなるこなしなり。  
此の間赫映姫思入ありて

姫

おぼつか。三四年は、只思ふにだに經べかるを。さりとは疾しや人業。

と訝しむ思入。此のうち皇子指圖して舍人をして玉の枝を櫃より取出して翁に渡さしむ。  
翁は姫と共に之れを見ることありて

翁

げに此れこそは玉の枝。

姫翁

げに此れこそは玉の枝。枝は白がね。

皇

實は白玉。

姫翁

こがねの莖の目も文に。怪しきところ更に無し。

姫

人さまも好き皇子ぞ。

翁姫

はやく仕うまつりたまへ。

と翁夫婦は起上り玉の枝を捧げ持ちて姫の前へ直すこと。姫は其の

枝を手にも取らず。徐ら皇子に向  
ひて

姫

「そも何處にて此の玉の枝を得たまひけむ。  
先づそれを語らせられ候へ。」

皇

「やすき御事。いで其の頃は前一昨年難波の  
浦より船出して、行かむする方も知らざりし  
が

皇

「思ふことならでは生きて何かせむ。思ふこと  
ならでは生きて何かせむと。御國の春を見す  
てつゝ、行方いづこと白浪に、風のまに／＼  
漂へば

皇

「ある時は浪荒れて、海の底にも入りぬべく

舍

「ある時は風につけて、知らぬ國に吹寄せられ、  
鬼のやうなるもの出来て、殺さむとせしこと  
もあり。」

皇

「ある時は貝を取りて命をつぎ

舍

「ある時は種々の病をうけて、死ぬるにも倍す  
苦みをす。」

皇

「かくて船のまに／＼漂ひて、即ても死ぬるよ  
と思ふうちに、五百日といふ日の早旦に

皇

「神の恵みや厚かりけむ。不思議や遙かの海原  
に、前つ世の夢かとも。仄かに浮ぶ山見えた

り。風は和ぎ。浪は笑みて。目に見えぬ雨の  
絲の、濺ぐもよしや朝日影の、鈍めるもまた  
風情あり。

皇

これこそ求むる山ならむと

舎

船を岸邊へ寄せぬれば

とこれより皇子主従は徐ろに起ち  
て舞の介になる。従者一同聲を合  
せて誦ふ。

皇

紫翠漸く遠ざかり

一同

紫翠漸く遠ざかり。烟霏溟濛として。山影更  
に朧ろなり。登らむとすれど道見えす。只遠

近に微かなる

皇

くすしき鳥の囀り。

一同

迦陵頻伽の聲やらむ。

舎

さて崖面を經廻れば。苔は天鷲絨ふくよかに

皇

めぐし少女の柔肌

一同

なめらにて温よか。撫づる手も融くよ。さな  
がらなりや綾錦を。剪みて懸くる草の花。

皇

美香人を睡らしむ。

一同

うらめづらしや。篋篋の音の。幾緒か切れて  
ほのめくは。岩が根迄る眞清水。碧瑠璃の淵  
譬にあらなく。流るゝ水は水精の

皇

むすべば凝結る。

舍

溶けたるなり。

一同

時しもや谷蔭に。輝き出づる木々の枝。幹も  
梢も白銀にて

皇

莖は黄金。

舍

實は白玉。

一同

見る目も眩むばかりなり。

皇

これこそは赫映姫の。ゆかしがりたまふ玉樹  
よと

舍

からうじて船を寄せ。身を捨て、攀登り

一同

その一枝を手折りつゝ、後をも見ずして漕返  
る。八重の潮路の浮沈み。憂涙に志ほたれて  
生きむ心もなかりしが

皇

大願の力にや。藻屑ともならで見みゆる。嬉  
しさを思ひやりたまへ。人々。

と宜しくをさまる。翁姫は深く感じ入りたる思入。

翁

くれ竹のよの竹取の野山にも

姫

さやはわびしき節を見し。

皇

そのわびしきも忘られて。今日こそ乾け我が  
袂つゝむに餘る嬉しさよ。

翁姫皇子を姫の傍らへ請する其の間姫はやり思ひくしたる色あり。

姫

いかにせむ。心に著き譎詐も。色には何と明  
すべき。あら。術なの現身やな。

翁は姫の袂を引きて

翁

この上は左右申すべきところもなし。

姫

はやく奥に入らせられ候へ。

二人して早起たまへと促す。皇子も起ちて姫に寄りそひ

皇

いまさら何をたゆたひたまふぞ。

皇

あら。心いられや。

と姫の手を取る。姫は痛く思ひくしたる體なり。

第七段

此の途端騒がしき亂調子の器樂につれて作物所の司の工人漢部の内麿といふ五十歳ばかりの男を先に、若き工人甲乙丙三人をそこちや、そこちや、そこちやといふ捨白ないひいひ場に上り、内麿は右手に奉り文を挟みたる青竹を捧げながら門口に駈寄りて

内

こゝちやくく。

と一同門内を覗き見て

工甲

「さればこそゐたわ。」

一同

ゐたわ。ゐたわ。ゐたわ。

舍

「や。わるい奴が來をつた。」

皇子の舍人目早くもこれを見つけて従者らと目を見合せ思入あり。

従

「わるい奴が來をりました。」

困つたといふ思入。此のうち内麿らはつかくと門内に入らむとす。竹取の僮走りいで、押し戻し

僮

「どこへくく。案内もせいで人の家へ躓込むといふことがあるものか。ちたい、わぬしたちは何者ぢや。」

内

「は。は。は。ゆるさしめくく。願事でおりにやる。願事でおりにやる。」

僮

ねぎであらうと、神子であらうと、今は珍客が  
わせられてぢやによつて、通すことはならぬ。

内

その珍客とやらに、用がおりやるによつて通  
さしめ。

僮

ならぬ。

内

とほさしめ。

皇

あら。折わろや。如何にせむ。身の上の大事  
とこそはなりにけれ。

此のうち皇子も内鷹を見つけて驚  
く思入あり。

此の間僮と内鷹は捨白にて押問答

數回あり。

皇子の從者二人は之れを機に工人  
らを追返さむと思附きたる體にて、  
同じく門外に出で、僮と立並びてい  
いや、ならぬといふ。若き工人ら其  
れと見知りて腹を立て、そこが知つ  
たことが、通さしめと突返す。僮  
これを見て腹を立て、おれがならぬ  
といふわと工人らを突戻す。

工一同

い、や。通さしめ。

僮一同

い、や。ならぬ。ならぬ。

と器樂に合せて入亂れて搦みあふ。

翁

あら。かしがまし。何事にてあるぞ。

内鷹は尙ほ器樂につれて從者の一  
人と搦みあひながら奉り文を高く

捧<sup>さ</sup>げて

内

きこしめせく。これは大切なる願事<sup>ねんじ</sup>でお  
りやる。玉<sup>たま</sup>の枝<sup>えだ</sup>についての奉<sup>たてまつ</sup>り文<sup>ぶみ</sup>でお  
りやる。

翁

なに。玉<sup>たま</sup>の枝<sup>えだ</sup>についての奉<sup>たてまつ</sup>り文<sup>ぶみ</sup>といふか。

内

なかく。あ痛<sup>いた</sup>くく。

翁

ともかくも其<sup>そ</sup>の奉<sup>たてまつ</sup>り文<sup>ぶみ</sup>を、此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>へ渡<sup>わた</sup>し候<sup>まう</sup>へ。

これにて皇子<sup>みこ</sup>は絶望<sup>ぜつぼう</sup>の思入<sup>おもひいれ</sup>ありて

皇

事の破<sup>やぶ</sup>れとなりけり。

と此<sup>こ</sup>の間向<sup>あひだな</sup>は器樂<sup>きがく</sup>に合<sup>あ</sup>せてなかし  
き立廻<sup>たちまわ</sup>りありて内廬<sup>うちまろ</sup>は辛<sup>から</sup>うじて奉<sup>たてまつ</sup>

姫

それにて讀<sup>よ</sup>ませられ候<sup>まう</sup>へ。

翁

心得<sup>こころえ</sup>て候<sup>まう</sup>ふ。なに。車持<sup>くらもち</sup>の皇子<sup>みこ</sup>の君前<sup>きみまへ</sup>

一<sup>ひと</sup>昨年<sup>し</sup>より賤<sup>いや</sup>しき工匠<sup>たくみ</sup>らと諸共<sup>しよとも</sup>に同<sup>おな</sup>じ所<sup>ところ</sup>に

隠<sup>かく</sup>れゐたまひて、貴<sup>かしこ</sup>き玉<sup>たま</sup>の枝<sup>えだ</sup>を作<sup>つく</sup>らせたまひ

て官<sup>つかさ</sup>を賜<sup>たま</sup>はらむと仰<sup>おほ</sup>せ給<sup>たま</sup>ひければ、奴等<sup>やつら</sup>心を

碎<sup>くだ</sup>き力を盡<sup>つく</sup>して、千餘<sup>よ</sup>日<sup>にち</sup>を經<sup>へ</sup>て玉<sup>たま</sup>の枝<sup>えだ</sup>を作<sup>つく</sup>り

て仕<sup>つか</sup>うまつりつるに、祿<sup>ろく</sup>いまだ賜<sup>たま</sup>はらず。あ

はれ、願<sup>ねが</sup>はくは、けふなむ賜<sup>たま</sup>はせ、分<sup>わか</sup>ちて家子<sup>けこ</sup>に

賜<sup>たま</sup>はせむとす。あな、かしこ。あな、かしこ。

翁<sup>おきな</sup>が此<sup>こ</sup>の奉<sup>たてまつ</sup>り文<sup>ぶみ</sup>を讀<sup>よ</sup>む間<sup>あひだ</sup>遠<sup>とほ</sup>く狩<sup>かり</sup>の  
小角<sup>くさく</sup>の聲<sup>こゑ</sup>聞<sup>き</sup>え次第<sup>しだい</sup>に近<sup>ちか</sup>くなること。  
皇子<sup>みこ</sup>は進退<sup>しんたい</sup>谷<sup>や</sup>りたる思入<sup>おもひいれ</sup>にて



皇

あるも起つも。はしたなりけり。

皇翁姫

あさましや。

姫

たゞ言の葉を飾りたる。玉の枝なれば眞情の

翁姫

根もなかりけり。いざさらば

姫

返したまへや。

翁姫

返すべし。

皇

返すことばも泣きつらの

と玉の枝を皇子の前へ直す。と皇子は面をそむけつゝ之れを請けて

一同

はぢこそ隠せ夕まぐれ。小暗きぞ便りなる。暗きぞ便りなりける。

と起上る。舍人をはじめ従者小童も起上り、一同聲を合せて

と皇子は小童が持ちたる古笠を取りて面をかくし悄然として門外に出づる舍人ら皆従ふ。此の時まで茫然と控へあたりし内麿之れを見て心附き門外にて追ひ纏る。

内

どこへく。どこへゆかします。官を賜ぶか。代を賜ぶか。

と舍人の袖を控へる。皇子願にて「打」と指圖する。舍人心得て

舍

こゝな奴が。思ひ知れ。これを賜ぶわ。

内

あいたくく。

と拳を固めて内麿の頬を打つ。内麿仰様に倒れて

内

おどれ。逆してなるものか。逆すことでは  
ないぞ。皆もつげ。あいたくく。やるま  
いぞ。あいたくく。やるまいぞく。

此のうち皇子の一行は急ぎ足にて  
場を退く。工人ら一同出来りて介  
抱す。内麿やうく起上り悔しげ  
に向うを見込みて

と工人ら一同去る。此れより先皇  
子主従と入りちがへて帝大臣一人  
其の他の官人大勢小童雜人らなる  
て徐かに場に登り好きとこゝろに立  
降りて竹取親子を垣間見たまふ。  
御狩の歸るさに立寄らせたまへる

帝

神かそも。人とは見えす。天地の

體なり。雜人らは獵の獲物などを  
荷ひたり。工人らの去ると共に帝  
の一行は歩みを進めて門に近づく。

大臣

きよらなるもの、萃つて、凝つてや人と現れ  
たる。

帝

あら。微妙じの玉人やな。

これにて官人等一同聲を合せて

一同

あら。微妙じの玉人やな。耀く君の目を見れ  
ば。天に暉暉の星見えす。衣透る君の膚見れ  
ば。皎潔と清らにして、嬋妍と、四下に照り

満ち、透徹つて、今たそがる、春の花の戸月  
あらなくに、下界に降りるる、玉兔の影かや  
餘んの光り。櫻が下枝に白銀照り、軒端の竹  
にも玉の光り。門邊に老いぬる松の葉も、金  
砂を篩つて燦けり。

帝  
あはれ。玉人の容顔に比ふれば

一同

人舉つて屍の、醜つ世に、女人の相をかりそ  
めに、常住の命の影向して、開くやくく空華  
の帳り、猛火の燭を掲げつ、無明の夢をや  
醒すらむ。滓濁の酒の酔心地、闌なりけり世  
人の眠り。醒すやくく羸陋の眠りを。半死の

帝  
夢をや醒すらむ。

大  
ふしぎやな。詠むれば

帝  
あらぶる心も和きて

大  
けがれたるは

帝  
きよまり

一同  
つち這ふ者もいつとなく

つち這ふ者もいつとなく、妙なる光りに誘は  
れて、心に翼や生ひぬらむ。我れにもあらで  
大空に、念ひを馳するぞ不思議なる。念ひを

馳するぞ不思議なりける。

諺ひ了ると帝は大臣に向ひて

帝

はやく姫を伴ひ候へ。

大

かしこまり奉りて候ふ。

と大臣は徐かに數人の官人を率ゐて竹取が家に入り、姫の傍らへ進む。帝も他の官人を從へて續いて入りたまふ。皆々驚く思入あり。

姫

これはいかに。何と遊ばされ候ふぞ。

此の時帝正面に進みいでたまひて

帝

けしうはあらぬ者なり。此の國のあるじぞ。餘りに比ひなく可愛しうおはすれば吾が家

へ將てゆかなむとす。

姫

うつくしと思せばとて將てゆかせたまはむはざふらふ。春の花も詠めてこそ。

姫

たをりたまふは風雅なし。彼の仲秋の明月も、人は只、影をこそ夜もすがら。

と立離れむとするを帝といめて

帝

いなく。愛で、やは欲しと思はぬ。領せむと思ふをこそ切なる戀の誠といはめ。

帝

ゆるさじな。ゐてゆかな。

と袂を捉へたまふ。

姫

この國に生れて侍らばこそ。

姫

ゐておはしがたくや候はむ。

と徐かに捉られたる袂を拂ふこと。

帝

などさることのあるべきや。……………

と再び捉らへむとしたまふ途端に  
忽然として姫の姿見えすなる。皆  
みなおどろき  
皆驚く。

官一同

こはくいかに。

翁姫

こはいかに。

一同

げに凡人にはあらざりけり。

と一同呆れたる科介。

帝

いでさらばゐてはゆかじとよ。もとの御容  
になりたまひね。

帝

あかなくも。まだきに月の隠るゝや。さしも  
妙なる影をだに。詠めて秋を慰めむ。影をだ  
に現じおはしませ。

と残り惜しげの御有様なり。  
されど姫は尙ほ形を現さず。只い  
づこともなく聲ありて

姫

いなく。月は戸外にいで、見るべきもの  
ぞ。春の夜の

此の時大臣徐かに帝の傍らに進み  
寄りて

大臣

はや更けそめぬ。

翁姫も恭しく進みいでい

翁姫

ともかくも

官人一同大臣の後へに従ひて

官一同

こよひばかりは九重に

と還御を勧め奉る介よろしくある、  
みかどさ、い、帝聽容れたまはぬ思入にて

帝

なにか歸らむ。戀の山。あなた面に隠るひし。

君をとめて歸らむは。魂とめたる心地し

て。物うくぞあるや。幾たびも

と皆々に促されて一たびは歸らむ

一同

また幾たびも行返り。背向きて停まる。姫ゆ

るに。……

としたまひながら又立ちまほりたまふ。一同聲を合せて

帝

あら。なづかしの面影やな。……

と此の途端姫の容ほのかに彼方に現れたる心。帝目早くみそなはして

と走り戻らむとしたまふを皆々とどめ奉りて

大臣

こは現なの御風情。

官一同

ありとも見えぬ幻影を。我れからや見いでた

まふらむ。よし在りとても玉の橋の、水に映  
らふ影なれば、渡らば絶えむ中空に。浮べる  
貝の花の城、たゞちには誰れか上らむ。時も  
術もあるべきを、御心鎮めおはしませ。

と皆々なだめ奉る。

翁廻

げに時こそは靈しきもの。やがても術の候は  
む。かしこけれども今は只

一同

只其の影を御つとに。こよひは還御あらせた  
まへ。九重に還御あらせたまへや。

と諫めつゝ送りいだし奉る。  
みかどと残り惜しげに見返りがちに  
出でたまふ。

攻之集

第一段

新撰の侍女甲乙二人前に置る。

さればよ、御心は物とも思はぬげの御気色  
して在らせらるれど月の程となれば甚じう  
悲しげに見えさせらるゝ

さりよの、姫君が月を御覽じて物思はし  
うに見えさせられたは此の春の始めよりで  
ありやう。月の影を見るは思むこともちやと  
あつて人の御心もつせぬはなほいとす  
れば入間には月を御覽せさせらるゝ、げに

まふらむ。よし在りても玉の橋の。水に映  
らふ影をばは。波らば絶えむ中空に。浮べる  
貝の花の城。たちには誰れか上らむ。時も  
術もあるべきを。御心鎮めおはしませ。

げに時こそは靈じきもの。やがても術の候は  
む。かしこけれども今は只

只其の影を御つとに。こよひは還御あらせたまへ。九重の還御あらせたまへや。

（一）  
（二）  
（三）

### 後之幕

#### 第一段

赫映姫の侍女甲乙二人場に登る。

甲  
「さればよ。闇には物をも思はぬげの御氣色  
して在らせらるれど、月の程となれば、甚じう  
悲しげに見えさせらるゝ。」

乙  
「さりよの。姫君が月を御覧じて、物思はしさ  
うに見えさせられたは、此の春の始めよりで  
おりやる。月の影を見るは、忌むことぢやと  
あつて、人々が制めさせられたなれど、ともす  
れば人間には、月を見て泣かせらるゝ。げに



此れは只事ではあるまい。ともかくも、此のよしを改めて刀自の君に申さう。

甲

よいところへ心附かせられておりやる。とりわけて今宵の望の月をば、堪へがたげに詠めさせらるゝ。早う家刀自に申して心得させ申したがようおりやらう。

乙

なかく。それがようおりやる。さらば、早う申さう。おりやれ。

侍女二人とも場を退く。赫映姫愁ひに沈める思入にて徐ろに登場す。

### 第二段

かひなしと思ふ涙に昏されて。朧ろに見ゆる

姫

月の影。うつし身ごころぞ理なき。

姫

と舞臺正面の好きところまで来て停る。

罪の限りの果てぬれば、罪の限りの果てぬれば。今宵を秋の名残にて、復た立還る月の宮。げに人間百たびの春秋は、天上の幾時ぞや。あはれ。无量妙光を具足して、眼裡に妍媸無う。念頭に是非を断じ、來去無礙にして、飛行自在とならむ身の、よし嬉しさはありとても、痛まじや、老人の、瑞齒ぐむなる今更に、最愛兒に棄てられて、生死苦樂の塵塚に、埋れ留まる憫れさよ。我れ未だ現身の、結縛の惱み歴然に、思ひやられて堪へがたやな。

と跪坐きて打黙く科介あり。

### 第三段

おきなと姫と場に登る。歎きあふる姫の傍らにあよりて

翁

こは何事にて候ふぞ。いぬる日も申し、如く御心に任せぬ事もあらば打明けて語りたまへとこそ。

姫

なう。あが佛御覽せよや。翁は片時の間に、斯うも老いたまひけるぞや。髪も白う、腰もかいまり、目も爛れにたり。

姫

これ皆姫の御上を

翁

思ひ煩ふ餘りぞよ。

と愁ひの科介あり。姫は徐かに面をあげて

姫

さきくも申さむとは思ひしかど必ず心惑はし給はむすらむと思ひて今までは過し侍るなり。

姫

さのみやはとて打出づる。ゆめく驚きたまふなよ。我が身は此國の人ならぬ。月の都の天少女。往昔の契りあるにより、暫く人界に假の親と、馴らひ聞えて候ひしが

姫

今は歸るべきになりければ今宵故の國よ

り迎の人々の参うで来むす。さらす去りぬ  
べければおぼし歎かむが悲しさに

姫

不老常樂の彼の國へ。去らむするもいみじか  
らず。春よりも歎き候ふなり。

と打歎く介あり。

翁

こはなでふことを宣給ふぞや。竹の中より  
見つけ聞えたりしかど菜種の大きさは  
しを我が丈立竝ぶまで養ひ奉りたる我が子  
なるを何人か迎へ聞えむすらむ。いかでか  
許し候ふべき。

姫

さりとても彼方には眞の父母の候ふものを  
や。

翁

よしや眞の父母ありとも年來の恩願をばよ  
も忘れたまふまじとよ。

翁

人に取らるゝ程ならば。我れ先づ死なめ。渡  
さむや。

と氣色ばみて姫に向ひ

翁

あの塗籠に姫をいらせ其の戸をば鎖固め母  
屋には僮ごもを番にするて守らせ尙ほ御門  
ものに奏しまつりて武人の人々を賜はりつゝ

翁

月の都の人し來ば。捕へさせてむ。心せよ。

と座を起つ。姫は姫を促して諸共に  
に起上りながら

姫

いざさらば我が姫を

と翁先に姫次に姫後に引添うて

三人

あの塗籠に鎖籠めて、あの塗籠に鎖籠めて、  
守り戦ふ準備も

と次第に奥へ向ふ。

姫

かひこそなけれ。風ならば

翁

とざしても妨げ。

姫

かたちあらば

姫

矢しても射らめ。

姫

たま幸ふ。神の迎ひを如何にせむ。生死も無  
き久堅の、天なる人を如何にせむ。人力を頼  
みたまふなよ。

と翁姫は姫を守護する體にて奥に入る。

### 第四段

僮

前の幕に出でたる僮酒に酔ひたる體にて高笑ひをしつ、蹠踏々々場に登る。侍女甲従いて出る。

ハ、ハ、ハ、ハ、何ぢや。天人が姫君を取りに  
来る。あるべいかいやく。ハ、ハ、ハ、ハ、

女

なうく。笑事ではおられない。酒の酔を醒  
まいて聞かしめ。

これにて僮むつとしたる思入。

僮

こよひは望の祝ひぢやによつて酒をたうべ  
たが何としたぞ。いはむすべもせむすべも  
なう貴いものは酒にしあると宣給はせられ  
たではないか。

女

酒をたうべたをあしいとはいはぬ。酔を醒  
まいて聞かしめといふことぢや。

僮

何を聞くのぢや。

女

はて天人が姫君を取りに来るによつて母屋

僮

にゐてきつと番をせいといふ命令ぢやわいの。

女

天人が取りに来るによつて母屋にゐてきつ  
と番をせい。ハ、ハ、ハ、ハ。わつけもないこ  
とをいふ。さて何として番をするぞ。

僮

戸を悉に鎖固めて番をせいとある。

女

何ぢや。悉に戸を鎖せ。悉に戸を鎖してお  
けば取らるまいといふことか。

僮

なかく

そのやうなことは兎角酒飲まぬ人がさかし  
げに言ふことぢや。あな醜く。賢明をすと

酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る。猿にかも似る。ハ、ハ、ハ、ハ。しておぬしは、其の天人とやらを見たことがあるか。

女

僮

「なんの、あらうぞいの。」

女

「ないものが、何として来といふことを知つた。」

僮

「あるじの君が然おほせられた。」

女

「して、それは如何やうな形の物ぢや。」

女

「さればいの。翼が有るものとも、無いものとも、又見る者の心々に見ゆるものともおほせられた。」

僮

「ハ、ハ、ハ、ハ。そのやうなものならば、何の戸を鎖すに及ばう。疾う降りて来。目に物を見せう。」

女

「すりや天人が怖うはないか。」

僮

「ハ、ハ、ハ、ハ。何の天人とやらが怖からうぞ。」

と尙ほ酔ひたる介にて、下の俗曲に合せて振事になる。時々侍女を無理やりに引出して柳にすることあり。(曲は陰にて唱ふ。)

僮

「酒五勺、飲んで浮世に怖いもの。何のてんぼの梨の皮、酸いも甘いも苦いのも、とんと忘れた其の味が。なちよにも、かちよにも、か」

ぢよにも。なぢよにも。忘られ。られぬを何とすべし。

人に生れて憂見むよりは、壺になりたや。酒壺に。香りにく。酒の香りに浸みたやの。

此の世樂しく暮さはまよ。來む世は鳥でも。けものでも。鳥でもく。蟲になろとも何のその。

雌ならおじやれ。雄でもおじやれ。さつても

さつても。面白天女の。舞の羽袖は。てんと

面白かむがらす。雄天はしやつ面。引搔き筆

つて。しやつ羽根ひつばぎ。しやつ骨たゝい

て。寢酒の下物に。下物に寢酒の味もよや。

おもしろや。

と浮れ踊るうち、女は偶と四下を見て驚き騒ぐ思入あり。

女 やゝ。これは何としたことであらう。四下が凄じう明るうなつた。

僮もやうく心附きて

僮 何さま。いかう明るうなつたわ。

女は空を見あげて驚きたる思入

女 や。お月が、いつもよりも、いかう大きう見ゆるではないか。

僮 何さま。大きう見ゆる。

女 やゝ。二かさも大きい。

僮

や。見るく大さうなる。や。例よりも五倍ほどになつた。や。十倍にも……………

と慄へだして

僮

これは只事ではおられないぞ。

と怖るゝ科

女

やれ。怖ろしやく。こゝにゐたら照り殺

されうも知れぬ。早う逃げう。

僮

いかにも。早う逃げう。

二人

やれ。おそろしやく。

と可笑味の器樂に合せて仆つ轉びつして場を退く。

第五段

此の時ほるか彼方に勇壯なる器樂の調べ聞えて、六衛の司某(二千人)の武装せる武人を率ゐて馳付け來る。司は古風なる烏帽子を戴き、身には鎧を着て、弓箭を携へ、眞先に立ち、武人凡そ六人は同じく弓箭又六人は矛又六人は拔放ちたる劍を提げたり。勅命を受けて天人を防ぎ捕へむ爲に寄せたるなり。

一同

大君の勅かしこみ。山は裂け。海はあすとも。怒猪の、かへりみせじな。益荒我れ。

と舞臺正面に來りて一同大空を見上ぐる介ありて



司  
あれを見よ。不思議やな。

一同

あれを見よ。不思議やな。折しも今宵仲秋の、望の月の輪見るうちに、十ばかりも合せたる、爛銀盤の光りとなつて、耀き輝く眞晝の光り。風遠近の、草の葉、木の葉の、葉色も、葉竝も、透徹つて、驚き飛交ふ羽蟻の、翅の文理も掲焉たり。

此の時いづこともなく神々しき器樂の調べ聞ゆること。一同耳を歎つる思入ありて

司  
ふしぎやな。天地爛然として、今まで在りつる大月見えす。

一同

いづこともなく妙音聞えて、彩雲流る、天の一方。見よ、煌星のやうなるもの、群り、燦き、列を作つて、見よ、鬚降り來る金龍。次第に近づく妙音樂の、調べも今や闌に、靈香薫じ、花降りかゝつて、あれ、間近く屋のむねに、怪しきもの、降立つたり。

一同たちくとなりて左右へ分れて退くことあり。司は尙ほ空を見上げて

司  
飛ぶ車には七寶耀き

一同

飛ぶ車には七寶耀き。翳せる羅蓋は萬華の彩り。ひらめく羽袖は透く金銀の、たゞよふ裳

裾は棚びく白炎。面は宛然明星の、見むとす  
れども、眼眩むで、瞬く間に、天地山川、只  
爛銀と化してんげり。

みなくめくろめ おもひいれしりる  
と皆々目眩く思入尻居にどうとな  
る。そのうち六衛の司は奮然とし  
て起上り、弓に箭をつがふ。全軍ま  
た武者ぶるひして奮ひ起つ。

司  
すはや妖怪ござんなれと

一同

すはや妖怪ござんなれと、弓に箭つがひ、矛  
劔を、振りかざいて立つことも、あら、何と  
せむ、手に力も、痿えかゝまるこそ不思議な  
れ。

どうまた  
と一同又たらくとなりて或は弓

司  
などてか得射ぬことあらむと、射れどもく、  
皆外さまに

や  
箭をおとし矛劔を心にもあらで抛  
ちて尻居にある。司ひとり無念の  
思入にて突立ちあがり空を睨みて

一同  
それで正しく現ながら、魘る、やうにぞ、立  
縮むことの怪しさよ。

みなくあき  
と皆々呆れたる科。尻居にどうと  
なりて、動かれぬ思入。

第六段

此の時、いづこともなく、神々しき器樂の調へ聞えて、其の調への仄かに成りゆけるころ、高きところに、只聲ばかりありて

一人

造鷹、みやつこまる。

と呼ぶ聲す。奥より翁、夢見る心地にて、我れにもあらず出て来る。

翁

夢に夢見る心地なり。誰人の我れを召したま

ふ。

と好きところへ来て、空を仰ぎつゝ、跪坐く。又前の神々しき器樂の音色聞ゆると共に、同じく高きところに聲ばかりして

一人

いまし、をさなき人。宿世の縁故あるによつて、絶えて人の世には在すまじきを、片時の程とて降し、を

一同

おほしたてつる功あれば、そこらの年ごろ、そこらの幸を賜はつて、身を換へたる今更に、何をか歎く。彼の君を、はやく返し奉れ。

器樂やむと翁は、やうくに面を上げ、おそろく空に向ひていふ。

翁

その昔は、人としも見えたまはざりしを、皆人のあこがる、美妙しの御相に、養育てまゐらせぬるは、一へに老生が功力なり。二十年餘

りにもなりぬれば、生みたるにもひとしからむを、おて歸りたまはんこと、理なうこそ候へ。

と卿言がましく言ふ。これには何の答もなく、又しばし前の妙音楽聞え、高きところの聲は奥の方に向ひて

一人

いざや、いざ。

一同

いざや、いざ。穢きところに何時までか、か

くて在せむ。いざや、いざ。大空へ還りたま

へや。

妙音楽の調べ、や、近う、や、急調となりて、靈香薫じ、花類りに降りかゝる心。一同又更に驚く思入。

翁

こはいかに。こはいかに。降りくる花の薄が

すみ。立籠めにたる塗籠も

一同

た、開きに開き、儼子なんども。人あらなく

に。只開きに、明けゆく山の端の、雲切れて、

朝媛神ぞ出でたまふ。

と奥より赫映姫前の段の装束のままにて、徐々と立出づる。

第七段

と其の後より、姫を先に侍女甲乙、呆れ驚き後追ふ心にて従いて出る。

姫

あれよく。何とせむ。

姫女

あれよく。何とせむ。あらく。悲し。何とせむ。

翁

われらをば

姫翁女

われらをば。いかにせよとて振棄て、天に登りたまふらむ。具してゐておはしませ。伴ひてゐておはしませ。

ひめよ 姫好きとこゝろに停る。 姫侍女らは おきな 翁の傍に坐ふ。 翁は 姫に向ひて 打 泣く 思入にて

と 姫のかたへ居ざりよりて、愁歎の 科あり。 姫もこれを憫れと思ふ思 入ありて

姫

おん上は申すもおろかになむ。さらぬ人もかゝる折に伴ひてゆかまほしさに得がたきをも竟めつれど人心のあさましう、空頼めとなりぬることの返すくも本意なくこそおぼえ侍れ。

姫

今はとて天の羽衣着る折ぞ。人の世いと哀れなる。假の縁の薄ごろも。脱ぎすて去る空よりも。まろび墜ちなむ思ひなり

此の間に何處よりともなく雪のやうに白き色したる羅衣舞ひ下る。それを姫の手に取ることありて

翁

つらからは只一むきにつらからで

と泣く科。 翁も涙にむせびて

姫

なげの情けのなかくに、住みうかりける空し世を

二人

君の妙相見えずならば、いかでかは命永からむ。あら。浅ましあさましの別離べつりや。あさましの別離べつりよやな。

と左右より姫の袂にすがりて歎く。姫辛うじて袂を拂ふ。翁と姫とは左右にいついゝて泣く。

第八段

姫は侍女をして羽衣を我が身に着せかけしめむとす。此の途端に彼

内

なう。まばらく。その御衣まばらく控へさせたまへところ。

方に勅使、内侍、中臣の房子の聲して

内

大内よりの御勅使にて候ふ。まばらく止まらせられ候へ。

姫

何。御勅使とさふらふや。承るほどもなし。といめたまふとも効なきなり。

内

いやとよ。永く止めさせたまはむとにはあらず。せめて御別れに此の御製を御覽せら

れよとの御事にて候ふ。

と恭しく短冊を女官して姫に渡さしむ。

おん名残の御歌とや。

と短冊を受取らむとするとき空中に人ありて姫に何事か語ることあるものい如し。姫空中の人に向ひたる思入にて

いやとよ。

人間別離の幾時は、天上の只刹那なるものを。

さのみな急かせたまひそ。

と女官が手より短冊を受取り

羽衣を着るときは心殊になるなれば、

うつゝ身ながら、讀まばや。

と此の時一種言ひがたき寂しき悲しき器樂の調べ聞ゆ。姫御製を讀む。

月影の入りぬる後に思ふかな。迷はむ闇の行末の空。

と讀了りて短冊を翁に渡す。翁受けとりて

月影の入りぬる後に思ふかな

姫も姫も聲を合せて

三人 迷はむ闇の行末と

姫徐ろに上手へ立離る。

内侍

〔叡慮かしこき御歎き。思ひやり奉るだにも恐れあり。いでや勅詔を傳へむ。〕

と此れにて女官一同も容を正し聲を合せて

一同

〔夫れ一天下の人主の心は、水に喩ふ黎民の槃盃にして、山野に渡る四時の風。吹きのまにまに青人草の、萌えいで、靡き。又枯る。其の源の眞光りの、曇らば闇の末如何に。〕

こゝに至りて武人一同恭しく容を正し列を整へて女官等に聲を合せて唱ふ。翁姫等は黙してをり。

一同

〔曇らば闇の末如何に。あかで止みぬる月の影

を。せめては心に現さむ。又來む世々の紀念を。遺したまへや。行末も。御面影を思ひいで。さやけかりきと語らむに。遺したまへや紀念。

と此の長き同唱の間に赫映姫は舞臺の奥の方に退き侍女ら介添となりて徐ろに被たる花やかなる上衣を脱ぐことあり。さて同唱の終らんとするころ一人の侍女をして脱ぎたる衣を他の一人をして羽衣を捧げ持たしめ、さて又自らは奇なる形の小さき瓶を右手に携へて元の居どころに立戻り同唱終ると徐ろに一同に向ひ

姫

〔入りぬるも最後ならず。盈ちぬるも又虧くるなる。月の輪ぞ我がたゞすまひ。今はしも脱



ぎおく衣を形見とも。満ちぬる月の秋の夜は、  
必ず見おこしたまへやとよ。

と侍女をして脱ぎたる衣を女官に渡さしむれば、内侍女官をしてそれを受けをさめしむることあり。姫は更に翁姫の方をかへり見て

姫

おぼろ夜の、只影にのみ憧るゝ、徒人も多き  
世に、二十年の其の間、あが子と憐み、うる  
はしの、人ともならしめたまひつる。功德の  
報い、賜ふぞ今、千年も死なぬ靈藥。有爲の  
世の稀事と、稱へられたまへ老人よ。假の世  
の父母よ。いでさらば、現世。

と携へ持てる小き瓶を翁に渡すことあり。やがて侍女は羽衣を捧げ

翁姫

逢ふことも涙に浮ぶ我が身には、死なぬ薬も  
何かせむと

て進みて姫に着せかくる。翁姫は忍びかねたる思入にて

翁姫

我れにもあらで走りより、これこそは怨みな  
れと。御羽衣を取らむとすれば

と翁姫の傍らへるざりよりて羽衣の袂を捉ふると女官も武官も一同驚きたる思入にて空を仰ぎ

一同

また降頻る花吹雪。靈香四邊に満ちくゝて、  
心耳に徹る妙音樂は、頑の心をも蕩して、骸  
は地に、たましひは、虚空に彩雲の棚引きて

はや舞上る媛神の、白雲の袖ぞ妙なる。

と此のうち姫羽衣を着了りて徐るに舞が、いりになる。皆々左右へ開いて驚き詠むる思入科介あり。かくて神々しき器樂の調につれて姫舞ふことよるしく、さて好きほどに舞ひ進みて

姫  
満ちぬる月の夜々は、我れを見おこせ。浮世人。

と此れより下の曲の間始終立舞ふこと。

一同  
圓満美妙の御相。

内侍等  
あるひは山河草木に影を寓し

翁題等

又は人間に照臨し

武人等

餘んの光りは宇宙を含む。

一同

たへなりく。彩雲の、棚引く空に、燦めき、  
ひらめく天の羽衣。靡くも返すも光りの眞袖。

内侍等

月見れば、千々に悲しき故よしを

一同

ちゞに悲しき故よしを。今こそ悟れ。月見れば、醜の世いと醜くけれ。三五夜中の影は又、満願眞如と聞くからに、尙あこがる、人心の、遣る瀬なきこそ有理なれ。

翁龜等

見るうちに、見るうちに

一周

ふる花吹雪、彩雲も、薄れに薄れ、妙音樂の調へも遠く、遠くなつて、天の羽衣、燦然に閃く羽袖も微かになつて、やがて纖塵も中空に、只明月ぞ残りける。明月ばかりぞ残りける。

姫舞ひをさむると、一同よろしく立ちかゝりて空を見あげ、随喜湯仰の思入科介。すべて活人畫模様。

# 大尾

明治三十八年十一月一日印刷  
明治三十八年十一月四日發行

定價金八拾五錢

著者

坪内雄藏

發行者

荒川信賢

印刷者

野村宗十郎

印刷所

株式會社東京築地活版製造所



東京市牛込區早稻田

發行所

早稻田大學出版部

大尾

價部三十八半十  
價部三十八半十  
且一日明



所 賣 發  
館 文 博

目丁三町本區橋本市京東

他 其

林書地各國全

八條五路

計 賣  
十 十  
十 十  
十 十